

聖書が私に教えてくれること

—『イザヤ書』、コルベ神父、そして山本七平—

千葉 紀

一 山本七平について

一九九一年二月、山本七平先生が六九歳で亡くなられた。故人に「先生」を付けるのはおかしいかもしれないが、私にとっては付けたい文章に馴染まないで、敢えて付けさせていたきたい。

先生が亡くなられたとき、或る雑誌が追悼特集号を組んだ。その中で私が今でも思い出すのが、作家・塩野七生氏の『五十本の蠟燭』という追悼文である。

外国に住んで長い私には、親しい人や尊敬する人が亡くなっても、お葬式に出席するために日本に駆けつけることができない。それで、私なりの葬送のしかたで欠席をわびることにしている。近くの教会に向いて、蠟燭を買い求めて、点火し、その火を見ながら亡き人を想うひとときを過ごすのがそれだ。亡き人がキリスト教信者でなくても、関係ないと思っている。
(中略)

七平先生は、私が次に、またその次に書こうと思うテーマを、何の説明もなしに話せる、日本では数少ない人のお一人であつた。地中海世界の歴史でさえ、先生の学識はスゴかった。(中略)

山本七平は燃えつきて去った、と私は思っている。

レオナルド・ダ・ヴィンチは、こんな言葉を遺した。

「十全に使った—このところはおカネを上手く費消したという意味の言葉を用いている—一日の終わりには快い眠りが訪れるのに似て、十全に使った一生の後には快よい死が訪れる」

先生の一生もこうであつたと、私は確信している。

今回の紀要論文では、山本七平先生から朝日カルチャーセンターの連続講義で、或いは、個人的に、或いは、小さな集まりで、

或いは、著作から等々、聖書に関して私が学んだこと、特に『イザヤ書』を中心に論じてみたいと思う。まったくの偶然であるが、カトリック教会『聖書と典礼（二〇一二・九・九）』（ミサのときに使うリーフレット）の表紙には「神は来て、あなたたちを救われる」（イザヤ書三五・四より）と書かれている。

堀田雄康神父が書かれているように、聖書は信仰深い人だけが、或いは聖書学者だけが理解するという狭量なものではなく、誰もが自分の力に応じて親しむ書だと予め述べておきたい。

さて、ここで山本七平という人物について簡単に説明しておくことにする。先生は四つの面を持っていると言われている。

一つはイザヤ・ベンダサン著として有名な『日本人とユダヤ人』に始まる日本社会論論者。

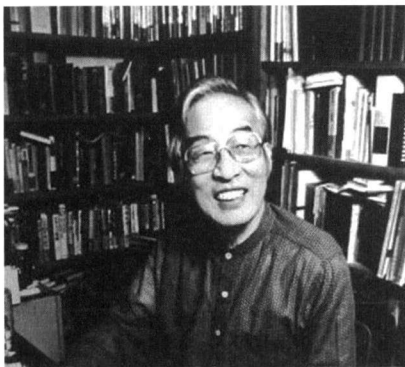
日本では「安全と自由と水はタダ」という、当時考えもしなかったことに気づかせた衝撃は今でも新鮮さを失っていない。また、『「空気」の研究』は今でも多くの人々が引用している本である。

例えばこうである。

（日本では）採否は「空気」が決める。従って「空気だ」と言われて拒否された場合、こちらにはもう反論の方法はない。人は、空気を相手に議論するわけにはいかないからである。

「空気」これは確かに、ある状態を示すまことに的確な表現である。人は確かに、無色透明でその存在を意識的に確認できにくい空気に拘束されている。従って、何かわけのわからぬ絶対的拘束は「精神的な空気」であろう。

以前から私は、この「空気」という言葉が少々気にはなっていた。そして気になり出すと、この言葉は一つの「絶対の権威」の如くに至る所に顔を出して、驚くべき力を振っているのに気づく。「ああいう決定になったことに非難はあるが、当時の会議の空気では……」「議場のあのときの空気からいって……」「あのころの社会全般の空気も知らずに批判されても……」「その場の空気も知らずに偉そうなことを言うな」「その場の空気は私が予想したも



のと全く違っていた」等々々、至る所で人びとは、何かの最終的決定者は「人でなく空気」である、と言っている。

KYという言葉が数年前から使われたようだが、右の文章は今から三五年前のものなのである。

第二は『ある異常体験者の偏見』を初めとする戦争体験からの著作。経験に基づいた日本の組織というものについての言及は鋭い。例えばこうである。

「安全地帯に在る間はどんな立派な人道的な言辞を弄していようと、いざとなれば、そんなものは全部『嘘のかたまり』にすぎず、自己顕示欲と虚栄心の所産にすぎないということは、もう見あきるほど見てきた。」

先生の外からは穏やかな微笑にしか見えないその内側には、烈しい憤怒と恋着を感じてならない。

そして第三に、『聖書の旅』『聖書の常識』『旧約聖書の人びと』等、旧約聖書を中心とした論究および翻訳。美術史家・辻成史氏との対話で次のような重要な発言をされている。

これは美術から少し外れるかもしれませんが、日本で一種の拒否反応を持つのは十字架です。神の子を人間が十字架に釘づけにしたのだ、こういうことを現に自分たちはやったのでこれが証拠だ、やったのだから正面から見つめ続けていると、これが彼ら（西欧人）の意識でしょう。これはドイツのダッハウ強制収容所の保存にも表れていて、あくまでそのまま、殺人用帳簿に至るまで、とってあって、決して「消し去ったうえで」、慰霊碑を建てるようなことはしてないです。同じ精神構造から来たのだと思いますが、十字架にはキリストが下がってなきやいけないし、手足に釘を打ってなくちゃいけない。それを目の前に据えているところに人間の救済があるという考え方になるわけです。そして、それが現実的であればあるほど意味がある。これはわれわれにはできないのでしょうか。ですから、日本の教会は十字架は象徴になっても、写実的な刑具でないのです。

『日本人と聖書』

第四に山本書店主としての出版活動である。出版活動といっても決して売れそうもない専門書を一貫して出し続けた。『ユダ

や戦記』『ユダヤ古代誌』『イエス時代の日常生活』等々。特に自ら翻訳されたウエルネル・ケラーの『歴史としての聖書』については、講義を終えてくつろいでいるとき、「これは良い本ですよ」と言ってくださったことを思い出す。

四つに分けたのはあくまで便宜的なもので、これらの底流にはみな同じ精神が流れている。

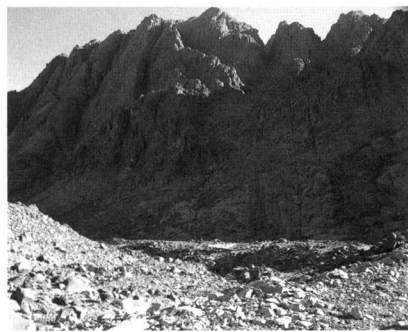
山本書店を立ち上げたばかりの頃、家屋が全焼するという悲劇に遭われた。そのときの、れい子夫人が語った言葉が強烈だった。

火の勢いが、もう手をつけることができないものだとかわかったとき、主人は、ふるえて泣いていた私に、私たちの家の最後を見届けようといいました。止めても、主人は聞き入れようとしません。家のほうに近寄りました。そして、腹わたを振り絞るような声で叫びました。「転んだら起きればいいんだ、転んだら起きればいいんだ、転んだら起きればいいんだ」と。保険もまだつけていないうちの出来事です。

『夫 七平との歳月』

先生は他からは「評論家」と呼ばれていたが、自らは一度もそう言ったことも書かれたこともない。肩書きは常に「山本書店主」であった。山本書店の出版によって、どれだけの学者が助かったことか計り知れない。形式的に四つに分類したが、私は、特に第三および第四に強く畏敬の念を抱いている。シナイの荒野やヨタファタの遺跡で、井戸の残骸や城壁に触りながら、聖書について語るその声は、聖書を心から慈しむようにふるえていた。

先生の引用はほとんどが旧約聖書からであった。信仰の立場からではなく、つねに聖書学者であり、考古学者、歴史家として徹底していた。なかでも『イザヤ書』については多くを教えられた。これから『イザヤ書』特にその五三章に書かれている「苦難の僕」について論じていくが、内村鑑三の流れを汲む無教会派の先生が、『イザヤ書』に関した文章の中でこう書かれている。



シナイ山

イエスが自らを「苦難の僕」としたのか、人びとがそう見たのか、これまた謎であるといえよう。

だが「使徒行伝」のように、「ペテロ第一の手紙」のように見たことがイエス理解の一つの伝統となり、「御足の跡を踏み

従うように」コルベ神父のような人を生み出した。これが、この思想が現在にも生きている証拠である。

カトリックの神父・コルベ神父に言及しているのである。

そこで次に『イザヤ書』五三章について述べる前に、コルベ神父について述べることにする。

二 コルベ神父について

コルベ神父について述べた書籍は多い。簡単にコルベ神父に関する年譜を載せておく。

マキシミリアノ・コルベ神父年譜

○幼・少年時代（ポーランドにて）

一八九四年 誕生

一月八日、ポーランドの中央部、ロス市の南、ドウインスカ・ヴォラに、織物職人の父ユリオ・コルベ、母マリア・ドンブラスカの次男として生まれ、ライモンドと名づけられた。

一九〇四年 一〇歳

夢の中に聖母が現れて、赤と白の二つの冠を示される。赤は殉教、白は純潔を意味する。

○神学生時代（ポーランド、イタリアにて）

一九〇七年 一三歳

復活祭のころ、司祭になる決心をたてる。

一〇月、レオポリ（ルヴォフともいう）の小神学校に入学する。三年間小神学校で学ぶ。

一九一〇年 一六歳

九月、コンベンツアル聖フランシスコ修道会に入会。

着衣し、修道名マキシミリアノを名のり、修練をはじめ。

一九一二年 一八歳

一〇月、ローマに留学・グレゴリオ大学で三年間、哲学のコースを修める。

一九一五年 二一歳

一〇月、哲学博士号をうける。ついでコンベンツアル国際大神学校で四年間、神学のコースを修める。

一九一七年 二三歳

一〇月、六人の同志と聖母の騎士信心会を創立する（この信心会は一九二三年一月、聖座より認可された）。

一九一八年 二四歳

四月、司祭に叙階される。

一九一九年 二五歳

七月、神学博士号をうける。国際大神学校を卒業。ポーランドへ帰国する。

○病苦と創設の時代（ポーランドにて）

一九一九年 二五歳

クラコフに赴任。コンベンツアル会大神学校の講師となる。秋に肺結核がこうじ、クラコフの病院に入院する。

一九二〇年 二六歳

一月、ザコパネの療養所に入院する。病状は悪化する。

一九二二年 二七歳

約二年の入院生活のあと、クリスマスのころに退院してクラコフへ。

一九二二年 二八歳

退院したばかりの肺病患者がひとりでマリアの小冊子『汚れなき聖母の騎士』を発行し始める。

一〇月、グロドノ修道院に移り、ここで本格的に印刷を開始する。

一九二六年 三二歳

再びザコパネの療養所に入院する。

一九二七年 三三歳

退院してグロドノへもどる。

一〇月、ワルシャワ近くにニエポカラヌフ（無原罪の聖母の園）と呼ばれる修道院を設立する。

一九二九年 三五歳

クリスマスのあと、東洋への宣教を思い立ち、ローマに赴き、総会長から宣教の許可をもらう。研学中の里脇神学生（後、

枢機卿)に会い、早坂久之助長崎司教あてに紹介状をもらう。

○東洋宣教・日本時代(長崎にて)

一九三〇年 三六歳

二月、四人の修道士と共に船で東洋へ向けて出発。上海に下船。支那の支部を開設。

四月二四日、ゼノ、ヒラリオ両修道士をともなつて長崎に着く。一カ月後の五月にマリアの小冊子『無原罪の聖母の騎士』を日本語で創刊する。

大浦天主堂下の仮修道院に住む。

田北耕也氏が仮修道院を訪れ、約半年間共同生活をする。

大浦神学校の哲学教授を二年間つとめる。

六月から八月まで、管区会議のためポーランドへ帰国する。

一九三一年 三七歳

五月、長崎本河内町(現在地)に「無原罪の園」修道院を開く。

一九三六年 四二歳

五月、管区会議のため長崎を出発する。

ポーランド・ニエポカラヌフの院長に再選される。

一九三九年 四五歳

九月、第二次世界大戦はじまる。ドイツ軍ポーランドに侵入。ニエポカラヌフはドイツ軍に占領される。

九月下旬、ドイツ軍に逮捕されてアムティッツに入れられる。十一月にオスチエスローに移る。

一二月に解放されニエポカラヌフへもどる。

一九四〇年 四六歳

ニエポカラヌフは治療所となり、負傷者や避難民の救護に当たる。

一九四一年 四七歳

二月に再逮捕され、ワルシャワのパヴィアク刑務所へ入れられる。

五月、アウシュヴィッツへ移る。まず教会関係者の第一七号獄舎へ入れられ、重労働を課せられる。病で倒れ、収容所内の病舎へ三週間ほど入院する。ついで労働不能者の第一二号獄舎へ移る。

二、三週間の後、農業従事者の第一四号獄舎へかわる。

一人の収容者が逃亡し、ドイツ軍所長は報復として一〇人を餓死刑に処すると発表し指名が行われた。死刑と決まった若い父親ポーランド人兵士の身がわりを進んでひき受け地下牢にくだる。

八月一四日帰天

一九七〇年 一〇月一七日、バチカンの聖ペトロ大聖堂において教皇パウロ六世より「福者」の位にあげられる。

一九八二年 一〇月一日「聖人」に列聖。

遠藤周作の『女の一生 二部・サチ子の場合』には、『沈黙』、『死海のほとり』を思わせる心理描写で、コルベ神父とその周辺に人物が書かれている。

少々補足しておこう。

マクシミリアノ・マリア・コルベ。一八九四年、ポーランドに生まれる。貧しいはたおり職人の息子であった。幼時に、赤と白の冠を持つ聖母の幻を見た。幼いマクシミリアノは、その二つが殉教と、純潔をもとにした修道生活とを、それぞれに示すものであることを本能的に悟ったという。

《どちらを？》

と聖母が聞く。

《両方を下さい》

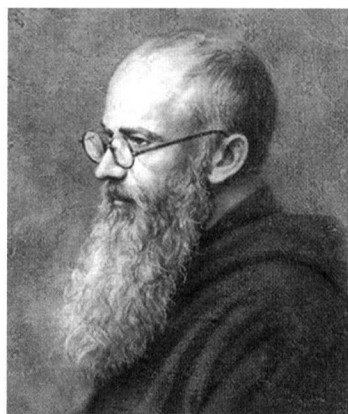
とマクシミリアノは答える。

フランシスカンの修道院に入り、聖母の騎士会と呼ばれる修道院を創立した。極貧の中で神父は印刷による布教にうちこんだ。カトリック・マスコミの開祖である。

一九三〇年四月、神父は長崎へやって来た。ここに、日本の聖母の町を設立するために。結核の既往症がある神父には日本は苦難の時代だった。

始終発熱に苦しめられ、日本の食物を食べることもできない。

一九三〇年小冊子『無原罪の聖母の騎士』を日本語で創刊した。月刊『聖母の騎士』二〇一二年一〇月号は通巻八九七号になる。



「聖母の騎士」となろうとする人々の目ざすべきものは次の四つである。①その人の生き方自体が神の望まれる通りに動いていること、②よく祈ること、③苦しみに耐えることを喜ぶこと、④労働を愛すること。

一九三六年に、神父は既に大戦を予感させる暗雲の濃く立ちこめたヨーロッパに帰る。そしてラムスドルフ、アムティッツ、オスチェシフと三カ所の収容所生活を経験した挙句、一九四一年遂にそこから戻ることのなかったアウシュヴィッツに送られる。アウシュヴィッツ、「労働は自由を与える（アルバイト・マハト・フライ）」と門の上に書かれた収容所。人々はそこを死の収容所と呼んだ。

少しでも働けるものは、生きることをおびやかされるほどの重労働をしいられ、働けないものはガス室で「始末」された。七平先生の言う「コルベ神父のような人」とは、勿論、極東の国に宣教活動に来たことではないし、アウシュヴィッツで亡くなったことでもない。

では、先生がコルベ神父に言及したのは何故なのか、理由は何か。的確な表現が思い浮かばないので、素朴に感じたままの言葉で言ってみる。

それは「その人のために死ねるか」、これだと思う。

話をアウシュヴィッツ収容所に戻そう。

コルベ神父らが収容されていた第十四棟から、作業中に一人の逃亡者が出た。警察犬まで導入しての搜索が無駄に終わったことから、同十四号棟にいた「囚人」に対する「罰」が始まったのである。

ここからは曾野綾子氏の『落葉の声』という強く心打つルポルタージュから引用していきたい。

ようやくその棟の囚人たちは罰としての百八十分間の起立から解かれた。しかしそれでは終わったのではない。既に夜九時であった。スーブの鍋が台所から運ばれる。飢えた人々は、胃の腑にくいこむような匂いに目まいがしそうになる。しかし鍋はそこに置かれたまま、配ることは許可されない。たつぷりと囚人たちのいじらしい期待を弄んだ挙句、鍋の中身は、空地の端に行つて、そのままわざと捨てられた。

その夜、第十四棟の囚人たちが眠れなかったのは、飢えのためだけではなかった。飢えにもまして、重い悪夢のような予感があった。

明日、必ず報復は行われるであろう。十人が餓死刑室に送られて、二度と帰っては来ないだろう。

それは長くゆつくりと人間をさいなむことを目標に、綿密な計算のもとに考え出された処刑の方法であった。人間が一刻一刻、人間を失って行く過程が歴然と見えるような状況を創ることが望ましかった。その過程をじっと見つめる時にのみ、それを計画した人々は神をうちまかしたことを確認する。神の面が次第に色褪せ、渴き上り、崩壊し、そこで初めて人間の勝利の快感が襲って来る。

飢えは大したことはない。恐ろしいのは渴きである。

「血は沸き返り、脳は爆発を繰り返して、次第に狂気に陥る」と言われるその過程であった。この拷問の方法は既に聖書の中に暗示的に語られている。十字架につけられたキリストが訴えたのは、飢えではなく、渴きであった。兵士はそれに対して酢を与えた。しかしそれはまだ手ぬるい。このポーランドの豚共は自分の小便を飲めばいいのだ。

指揮官が十人の死刑囚を選び出していく。「こいつ!」「それと、こいつ!」という具合に。そのとき、選ばれた餓死刑囚十人の中から、弱々しくすすり泣く声が聞こえてきた。その場面を遠藤周作は次のように書いている。少し長くなるが引用する。

彼らが今から入れられる飢餓室は左方に見える第十三号棟の地下にある。一階は訊問室じんもんと拷問室がならび、その地下には飢餓室と窒息室とがならんでいる。

この二つの部屋は最も残酷な死の部屋だった。飢えて死ぬか、酸素がなくなつて死ぬか、どちらも最後まで出てはならぬ死の部屋である。

「女房と……子に……会いたい」

泣きじゃくっていたあの男が、この時呻くように叫んだ。文字通り腸をしぼりだすような声だった。

ミューラは兵士たちに合図をした。第十三号棟に連れていけという合図である。

その時だった、助かったグループから、一人の囚人が列を離れてのろろと前に歩いてきた。長い間、立たされたためか、その歩きかたはまるで玩具おもちゃの人形のように緩慢で鉛の足を曳きずっているようである。

痩せこけて、丸い眼鏡をかけた男である。

「私を……」と彼は疲れた声で言った。

「その泣いている人と、かわらせてください」

つかれきった顔に丸い眼鏡をかけた囚人はこの言葉を言ったあと、ミューラの前で不器用にじっと直立していた。

それはまるで、修道院で修院長の命令をさく修道僧のように従順そのものの姿勢だった。

「何だね」

ミューラの声は薄気味わるいほどやさしかった。

「私を……あの囚人の身代りにならせて頂けませんか」

丸い眼鏡の囚人はひくい声でくりかえした。

ミューラの顔に――彼だけでなく背後にいた兵士の顔にも、ほとんど狼狽にも似た驚愕の色が走った。

「なんだって」

「彼には妻や子供があります……私は神父ですから死んでも嘆き悲しむ妻子はありません。それに私は年をとっています」
ミューラは茫然として相手の顔をみつめていた。それから、やっとたずねた。

「名前と番号は」

「マキシミリアン・コルベ。番号は一六六七〇です」

またミューラはしばらく黙っていた。彼は救いでも求めるように副所長のマルティンをふりかえった。だがマルティンもこの思いもかけぬ出来事に硬直した顔をしていた。

「お前は自分がどうなるか知っているのか」

「知っています」

この時ミューラは視線をなぜかそらせた。そらせたまま泣いている囚人を指さして言った。

「列に……戻れ。他の選拔者は前に進め」

その言葉に肩をおとし、九名の生贄^{いけにえ}はのろのろと歩きだした。一番最後から、コルベ神父が少し離れて、やはり、うなだれながらついていった。それは年おいた、あわれな驢馬^{ろば}の姿のようだった。だがこの時だけは兵士もカポー（ユダヤ人の囚人の中で、親衛隊の下部機関として一般のユダヤ人囚人の責任者）も、いつものように罵声^{ののしり}をあげせなかった。

残された囚人たちも、その十名が去っていくのを茫然と見つめていた。

《かわいそうな妻！ 子供たち！》と弱々しくすすり泣いたフランチエック・ガイオニエック。ガイオニエックには、指揮官の前に進みでて、話をしている一人の男と指揮官が話しているドイツ語はわからなかった。

只彼は、進み出た同房の男が自分を指しているのを見た。言葉よりも明らかに、ガイオニエックは、その男が、自分の身代

わりに死ぬことを申し出ているのだ、ということがわかった。

それはコルベ神父であった。

一瞬後に、ガイオニチュエックは自分の名が死刑囚リストから消され、自分は列に戻されたのを記憶している。その代わりにコルベ神父たちは闇の中に引き立てられて消えたのである。

アウシュヴィッツの歴史の中で、死を代わって受けたのはコルベ神父だけであるという。それは、もし《神》がそこにいなければ、とうてい理解しがたい行為である。

「潮の引くように」十人は次々と死んで行く。裸で投げ込まれていた人々は、痩せたあばら骨を天にさし向けて、最後の何十時間を只、その胸を喘ぐように動かして生き続ける。神父はそれらの人々に優しく祝福を与える。しかしやがてそれも限度に来た。

神父は遂に壁にもたれ、脚を投げ出した恰好で、入口の鉄扉を見つめたまま動かなくなっているが、まだ死んでいるのではない。

やがてSSが注射器をもった医師を伴って、部屋に入り、眼を開けたまま死んでいたという姿は、「恍惚の状態にある」かのようだったと言われている。

神の存在を信じた強烈な生涯である。いい生涯とは、例外なく強烈なのだろう。

ただ、私の心に突き刺さるのは、ガイオニチュエックの代わりに死を自ら選んだというコルベ神父の行為ではない。

『落葉の声』は、ガイオニチュエック家を通訳の神父と一緒に訪問し、アウシュヴィッツから解放された後のガイオニチュエック家のその後を聞くことに焦点を当てている。

ガイオニチュエック夫妻には二人の男の子がいた。その二人とも戦争で亡くなったのである。

曾野綾子氏は書いている。

これが、コルベ神父の命を賭けて救おうとしたことの実態だったのか。私はテーブルの下で手をこすり続けた。二週間苦しんで、死んで、それで一軒の家庭の幸福さえも、実際には、^{あがな}購うことにならなかったのか。

その後の描写は、長いがそのまま引用する。

「神父さま、もう一つだけ訊ねて頂きたいことがあります。ガイオニチエックさんは、コルベ神父さまによって、生命を助けておもらいになったのですが、アウシユヴィッツを出た後、生きて甲斐なき命だった、とお思になったことはないのでしょうか」

神父は、静かな口調で伝える。ガイオニチエック氏の顔からは穏やかな表情が消えはしなかった。

「はい、本当に、自分が死んでしまったほうが、よかった、と思つた、とガイオニチエックさんは言っています。帰つてきてからのガイオニチエックさんには、特別の仕事も趣味も、何もなかった、そうです」

ガイオニチエック夫人が席を立つた。何か用事を思いついたように見える。しかし、私は特別の気配を察した。私も後から席を立つた。ドアを開けて、小さな玄関ホールの反対側が、夫妻の寝室だった。夫人は、レースのカーテンのかかった窓に後ろ向きに立っている。私はノックもせず夫妻の寝室に入り込んで、夫人の肩を後から抱いた。夫人は顔中、濡らしたまま、こちらを向いた。二人とも人目をはばかりことはなかった。うつつというしい、詐欺に等しい人生を私は感じていた。善きことをすれば、必ず報いてくれる「神」などというものは、この世の阿呆な人間の考え出した、ハリボテの神であつた。

「神」は只、人間に使命を与えているだけのように見える。マクシミアノ・コルベには、人間が人間に究極のところ何をなし得るか、という問いについて答えを出すことを。そしてこのガイオニチエックの一家には、そのコルベ神父の仕事に、生涯を賭けて手を貸すことを。使命は幸福などというものとは丸つきり無関係であつた。強いて言えば、使命を自覚した時にだけ「幸福」の実感が、火がついたように燃え上がるのかも知れないが、いずれにせよ、それは惨憺たる幸福だ。

ガイオニチエック夫人は、私を抱きしめていた後、突然、身を起こした。ベッドの一つに山のように乾いた洗濯物が置いてある。夫人はその中から、洗いたてのタオルを取って、私に顔を拭けと言ってくれているのだつた。私は一瞬、たじろいだ。私の涙など、無責任なものなのだ。私はそれを拭く資格などない。

しかし私は、夫人の親切を無下に退ける訳にはいかない。私がそれを顔におし当てた時、弱々しいポーランドの秋の太陽の体臭が生証しのようにふっと匂つて来た。

「善きことをすれば、必ず報いてくれる『神』などというものは、この世の阿呆な人間の考え出した、ハリボテの神であつた」、「神」は只、人間に使命を与えているだけのように見える」という箇所、「使命を自覚した時にだけ『幸福』の実感が、火がつ

いたように燃え上がるのかも知れないが、いずれにせよ、それは惨憺たる幸福だ」という箇所は何度、目が釘付けになったことか。

「人間は生かされている」とも言えようか。

「絶滅収容所」「ユダヤ人問題の最終解決のための収容所」などと呼ばれたアウシュヴィッツ収容所。ただ「ユダヤ人である」というだけの理由で、過酷な強制収容所生活を余儀なくされたことを、フランクは『夜と霧』の中で述べている。何故、ユダヤ人であることが？

コルベ神父についての最後に、旧約聖書学者・秋吉輝雄氏が作家・池澤夏樹氏との対談の中で話されていることを紹介しておきたい。

秋吉 イエスを裏切ったとして有名なユダにしても、ユダヤ人の間ではユダという名前はごく普通の名前で、同名異人の多くのユダが存在するのですが、そのことすら通じないところまでキリスト教は広がっていく。ユダの裏切りも、その名が由来するユダヤ民族一般と同一視されて、これがまず一つの他者から見るユダヤ人像となり、ユダヤ人＝裏切り者という構図ができあがる。もし裏切ったのがほかの名前のユダヤ人、たとえば「男」「人間」を意味するアンデレだったとしたら、当然ユダは悪者にはなっていないわけで、ユダヤ教全体に対してここまで悪者扱いができたかどうか。つまりは、ユダヤ人、ユダヤ教が他者的な存在になったから、あるいは他者とすることでキリスト教が浮かび上がってきたのです。（『ぼくたちが聖書について知りたかったこと』二〇〇九年 小学館）

三 映画『ヤコブへの手紙』

「人間は生かされている」と書くとしても触れておきたいのが、二〇一〇年のフィンランド映画『ヤコブへの手紙』である。

二年前、友人からこの映画の鑑賞を勧められた。初めは新約聖書の中の書簡『ヤコブの手紙』の映画化かと思ったが、新約聖書にある『ヤコブの手紙』と映画『ヤコブへの手紙』とは、僅か一文字の違いでも全く異なるものであった。

久しぶりに良い映画を観て、魂が揺さぶられたという表現が適当と思えるくらい大いに感動した。

本作品で、第六六回（二〇一〇年）フィンランド・アカデミー賞（Jussi Awards）作品賞と監督賞を受賞している作品である。

一二年間暮らした刑務所から出てきたレイラ、人々からの手紙を待ち続ける盲目の年老いた牧師ヤコブ、そして悩める人々からヤコブ牧師への手紙を届ける郵便配達人、この三人の登場人物が紡ぐ物語を、静謐ながらも、温かくやさしい視線で綴る映画である。

公式 Web サイトやパンフレットから「粗い」あらすじを中心に紹介してみることにする。

舞台は一九七〇年代のフィンランドの片田舎、白樺に囲まれた古い家はアンドリユー・ワイエスの絵画の世界を思わせるものである。模範囚として恩赦が認められ、一二年ぶりに不本意ながら社会復帰した元殺人犯のレイラ（カーリナ・ハザード）。

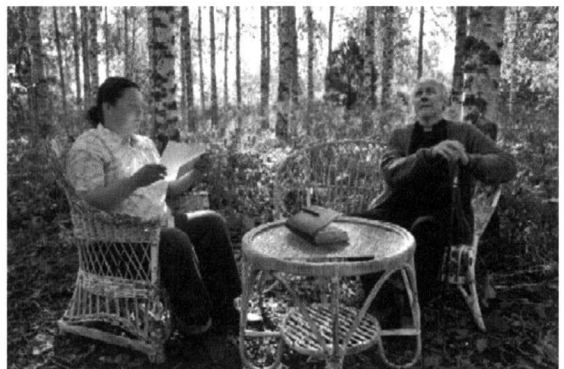
身寄りがなく、盲目のヤコブ牧師（ヘイッキ・ノウシアイン）の自宅に住み込みで働くことになった。

レイラを温かく迎え入れるヤコブ牧師。しかし、レイラは感謝するどころか、ヤコブの厚意を受け入れようとせず、そっけない態度をとってしまう。

そんなレイラにヤコブ牧師は、目の見えない彼がただ一つできない仕事つまり、毎日届く手紙を読み、その返事を彼の代わりに書くことを依頼する。

信者から毎日のように届く人生相談の手紙を、牧師ヤコブに読んで聞かせるという大切な仕事が好きになれないレイラ。毎日手紙を配達に来る郵便配達人をもうとうとうしく感じ、彼がヤコブ牧師に届けた人々からの手紙を勝手に捨ててしまうことさえあった。毎日手紙を届けながら、牧師のことを心配する郵便配達人もまた、突然現れたレイラに不信感を持つ。そして、相容れない二人の仲は、険悪になっていく。

ヤコブは牧師としてキリスト教の精神である「隣人愛」を説き、日々誠実に実践しているが、必ずしも自分が望む形で人々に尽くすことができていない現実を前に、心が折れかかり、一方、レイラは「殺人者」「悪者」として世間からのけ者にされ、世間を恨み、深い自己嫌悪に陥る。ある日、毎日届いていたヤコブ牧師への手紙がぷつりと届かなくなる。手紙を通して人々と接することが生きがいとなっていた彼は、すっかり気を落としてしまう。一方レイラは、ヤコブ牧師の元を出て行



くことを決心するが、自分には行くべき場所も、待っている人もいないということに気付き、深く絶望し、自殺を図る。そんなレイラに、ヤコブ牧師は「まだこの家にいてくれたんだね」とやさしく語りかける。ただ一人、孤独な自分を受け入れてくれるヤコブに、レイラはようやく心を許し始める。手紙も届かず、日に日に弱っていくヤコブを見かねたレイラは、郵便配達人に手紙が来なくなった理由を尋ねる。すると、「来ない手紙は届けられない」という郵便配達人。そこで、レイラと郵便配達人は一つの約束をする。明日、必ずヤコブへの手紙を届けること。しかし、翌日も相談の手紙は届かなかった。それでもレイラは、ヤコブ牧師に「手紙が来ましたよ」と告げる。そして今まで誰にも話せずにいた、あることを打ち明け始めるのだった…。

「親愛なるヤコブ牧師…。」

クラウス・ハロ監督は「誰の役にも立たない人間はいない。世の中からまったく必要とされなくなってしまうたと自分には思えたとしても、存在意義はある」ことを伝えたかったと語っている。美しい情景とショパンの『夜想曲』、ベートーベンの『メヌエット』等の旋律も感動を誘う。

ヤコブ牧師が後半に語る台詞は心を打つ。

「レイラ、今まで私は、自分が神のために役立っていると信じてきたが、逆だったのかもしれない。

手紙はどれも私のためだったのだ。

神が与えてくださったのだよ。

すべてはこの私を天国に導くため」

神の存在を信じるが故のコルベ神父の生き方と、絶妙に符合する気がしてならない。

コルベ神父、ヤコブ牧師双方とも、神との対話である。自らの上に存在するものを信じることが出来たが故に、その存在と対話し揺るぎない行動ができたのである。

イエスは、『イザヤ書』に記されている「苦難の僕」を意識して行動したと七平先生は語っておられるが、コルベ神父もヤコブ牧師も同じ図式なのである。

『イザヤ書』に入る前に、もう一つ、七平先生が教えてくれた非常に重要な言葉「トサフィスト」について言及しておきたい。

四 「トサフィスト」について

「トサフィスト」*tosaphist*, *-fist* という聞き慣れない言葉を教えてくれたのも、七平先生だった。これはユダヤ教徒の言葉であるが、ある英英辞典で *tosa* と引くと「strong big dog」とあって笑ってしまった。土佐犬のことだった。大きな辞書でやっと小さく載っているような単語である。

The Oxford English Dictionary にはこう書かれている。

Critical and explanatory notes on the Talmud. Hence *Tosaphist* (*-fist*), a writer of *tosaphoth*.

トサフォースの記者を「トサフィスト」と呼んでいるのである。そのトサフォースとはタルムードの注釈・注解を言う。急ぎすぎたかも知れないので、「タルムード」について補足しておく。

(一) タルムードについて

「タルムード」とは、元来、ヘブライ語で「学習」という意味であるが、しかし現在では「タルムード」といえば、代々のユダヤ教賢者の法規の解釈議論、またユダヤ伝説・逸話を収集した膨大な量の文書を指す。『ユダヤ学のすべて』から引用する。

ユダヤ教の伝統的説明では、モーセはシナイ山にて「成文律法」(旧約聖書中のモーセ五書、すなわち「トーラー」と共に、その解説である「口伝律法」も神から直々に授かったという。なぜなら、ユダヤ教にとって「トーラー」に書かれている神の命令を実行することが信仰の最重要課題であるが、しかし「トーラー」は、決して完全な法律文書ではなく、そのテキストには、様々な法的内矛盾を含んでいる箇所があり、また「トーラー」の細部には、実際に行うに必要な色々な付帯事項を読者がすでに知っているという前提で書かれている箇所も少なくない。つまり「トーラー」(成文律法)とは、その命令(ミツバー)を解釈して実際の法規(ハラハー)を定める作業を抜きに機能しない法テキストである。従って、モーセ以来、各世代が、成文律法解釈の学問的作業に取り組んで、法規を生み出してきた。この古代から途切れることのない学問努力の集積が、口伝律法なのである。

原則として、口伝律法は、人間の記憶にのみ頼って保持されるべきものであるとユダヤ教では考えられている。しかし、時と共に膨張していく伝承の量を口伝でのみ保存するには限界がある。また、人間の記憶にのみ頼ると、問題なのは、迫害や戦争の影響で、伝承を教える教師たちの学統が断絶することである。このような危機感に促されて、口伝律法の文書化が

なされる。その最初の文書化が、ラビ・ユダ・ハナシーの「ミシュナー」(三世紀)であり、そして、その締めくくりが「タルムード」である。

ユダヤ的教育が「答え」よりも「質問」を評価する理由は、この「タルムード」学習のせいであると言われる。右のことを踏まえて、「トサフィスト」について述べることにする。

(二) トサフィストという考え方

七平先生は、『日本人の人生観』(講演録)の中で、「トサフィスト」について語っている。

トサフィストというのはユダヤ教徒にある言葉ですが、同じことをキリスト教徒の側もやっていましたし、中国人もこれをやって来たわけですよ。自らの文化の歴史的な積み重ね、この過程が記録すなわち歴史です。

ヒストリア

文化の中心の、基本的なある一つのものに、永遠に意見を加えていく。その意見に対してまた意見を加えていく。(中略)……ただしそのいちばん元になっておりますいわゆる本文ですが、これは絶対手を加えない。同時にこれは消さない。そのまま残しておくわけですが、……(中略)……これをおさますと、時間的に、自分たちが、過去から現在までどういう発想の道をたどってきたのかということが一目でわかるわけです。

さらにこう語る。

たとえば終戦前の教科書を生徒に与えて、これはこう教えたけれども、じつはこれこれの点が正しくないということを下に注解で入れていく。今度は入れましたものをもう一回本にし直しまして、それをたとえば三十年後、いま読んでみると、また正しくない点は出てきている。そうしたらそれをまた注解に入れていく。(中略)……こうやっていきますと、人間と



注釈が書き込まれたタルムード

いうのははじめて自分の過去というものを正確につかむことができて、同時にこれの延長線上に自分の未来を予測することができるわけです。

一方、日本では「現在」に不都合なことは墨で抹消する、あるいはその時々「思想の衣がえ」をする、なかったことにするのである。先生はこう語っている。

しかし日本ではいわばその時々「欄外注」が順次にそのまま残っているのではなく、その時々都合、すなわち環境への順応の仕方によって、いわば「軸」であるべき本文を、墨を塗って消したり勝手に書き加えたりしてこれを唯一の「歴史」としますから、実際には「そのとき」に適合するように再構成されたその時点の物語でしかないわけです。いわば「その時点での真理」ですから、「各時点の真理」をたどって、それが伝統という本文からどの方向にどうずれているかを見つつ、その軌跡を「歴史」として、その延長線上に未来を予測することは不可能になるわけです。

美術史家・辻成史氏との対話を思い出していただきたい。先生が語った

これはドイツのダッハウ強制収容所の保存にも表れていて、あくまでそのまま、殺人用帳簿に至るまで、とってあって、決して「消し去ったうえで」、慰霊碑を建てるようなことはしてないです。同じ精神構造から来たのだと思いますが、十字架にはキリストが下がってなきやいけないし、手足に釘を打ってなくちゃいけない。それを目の前に据えているところに人間の救済があるという考え方になるわけです。そして、それが現実的であればあるほど意味がある。これはわれわれにはできないのでしょうか。ですから、日本の教会は十字架は象徴になっても、写実的な刑具でないのです。

の部分はまさに「トサフィスト」の概念がない日本を語っているのである。

本文は残し、解釈・意見を付け加えていくことによって、解釈の変遷を辿ることが出来るという発想。

キリスト教、ユダヤ教、イスラム教と人類の約半分は旧約聖書の影響を受けている。その人びとの底辺に「トサフィスト」の概念があることを、日本人は知る必要があることを先生は言いたかったのである。

先生の生涯にわたる著作全体が、「トサフィストの作業」の結果だったと言える。

トサフィストⅡ「本文にはこう書かれている。これはこう解釈できる」という論法はどこかで読んだことはないか。聞いたことはなかったか。

それは、キリストと後に呼ばれるようになった、ナザレのイエスが用いた論法ではなかったか。例えばこうである。

同害賠償（マタイ五・三八―四二）

「あなた方も聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしはあなた方に言うておく。悪人に逆らつてはならない。右の頬を打つ者には、ほかの頬も向けなさい。また、あなたを訴えて下着を取り上げようとする者には、上着をも取らせなさい。無理にも一ミリオンを歩かせようとする者とは、一緒に二ミリオン歩きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に背を向けてはならない」。

敵への愛（マタイ五・四三―四八）

「あなた方も聞いているとおり、『あなたの隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしはあなた方に言うておく。あなた方の敵を愛し、あなた方を迫害する者のために祈りなさい。それは、天におられる父の子となるためである。天の父は、悪人の上にも善人の上にも太陽を昇らせ、正しい者の上にも正しくない者の上にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる者を愛したからといって、あなた方に何の報いがあるか。徴税人でさえも、そうしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したからといって、何か特別なことをしたことになるだろうか。異邦人でさえも、そうしているではないか。だから、天の父が完全であるように、あなた方も完全な者となりなさい」。

「（旧約）聖書にはこう書いている、しかし私はこう解釈する」と述べて歩かれた、イエス自身が「トサフィスト」であつたと言ふことは間違ひであろうか。

「トサフィストの作業」が「未来への模索」に繋がる、という考えは、『日本人の人生観』を初め、多くの著作で先生が言い、訴え続けたことである。

迷路に迷い込んだかのような現在の日本、あるいはその中の組織に必要なことは、組織内でのトサフィスト的生き方を如何にして確立させるかということになるのではないだろうか。

後から見れば、如何に誤って見えようとも、絶対に抹消せず、試行と模索を重ねることである。現在、大きな問題である原子力問題について、以前、七平先生はこう書かれていた。

日本の原子力平和利用は大半が輸入であり、すばらしい勢いで技術が導入され、今ではアメリカと比べても、技術水準においては、ほとんど差はないという。しかし彼らは、成功せる五パーセントの成果のほか、九十五パーセントの失敗のデータをもっているが、われわれにはこれがない。われわれは彼らの五パーセントの成功を導入し活用しているからである。

(中略)

一方は、その成功に「失敗の記録」の積み重ねから成功を引き出したのであり、一方は、その成果に巧みに対応したわけである。そしてこの失敗はすべて、問題を解決し、成功に転化しうる「成功予備軍」であり最も貴重な資産なのである。トサフィストの生き方とは、結局この生き方である。

なお、この執筆は一九七〇年である。

五 謎の詩人・第二イザヤと『イザヤ書』五三章

旧約聖書をヒマラヤの連峰とするならば、第二イザヤ、なかでも五三章はエヴェレストにも比すべき峻峰である。その文体、思想、靈感の高さ、深さ、大きさにおいて群を抜き、その提起する問題の幅、射程においてこれにまさるものはないと言われている。それは永遠の謎をもつて今もなおユダヤ人とキリスト教信者に迫り、全人類に問いかけている。

数知れない学者がこの峻峰に挑み、その謎を解こうとして生涯をかけて努力しているが、その謎は未だ解けないという。恐らくそれは解くことはできない謎・問題なのかも知れない。

その謎とは何か。要するに、そこに描かれた「僕」が誰であり、その苦難が何を意味するか、である。



イザヤ (ミケランジェロ)

(『日本人と組織』二〇〇七年 角川書店)

ある者はモーセといい、他の者はエレミヤあるいは第二イザヤ自身であるという。

またある者は「遺りのもの」、理想の、あるいは現実のイスラエルと見、他の者は王、メシア、キリストと見る。その他、ウジヤ、ヒゼキヤ、ヨシヤ、エホヤキン、クロス、ゼルバベル、ネヘミヤ、エレアザル等々枚挙にいとまがない。いずれが正しいであろうか。

些か先を急ぎすぎたかも知れない。

映画『パッション』では、冒頭で

彼は私たちの咎のため傷つき

不義のため砕かれた

その傷によって

私たちは癒された

(『イザヤ書』五三章 紀元前七〇〇年)

と出てくる。

ここで『イザヤ書』の中で最も有名で、最も感動的かつ崇高で、難解な五二章一三節―五三章一二節を、昨年刊行されたフランススコ会聖書研究所訳から載せてみたい。

(一) 『イザヤ書』五三章前後 主の僕の苦難の後の栄光

「見よ、わたしの僕は栄え、

高められ、上げられ、大いに高揚される。

多くの者がお前の前で感嘆したように、

彼の姿は損なわれ、人とは見えず、

もはや人の子の風貌もない。

そのように彼は多くの国を驚かせる。

王たちは彼の前で口を閉じる。

彼らは自分たちに語られなかったことを見、

聞かされなかったことを悟るからだ」。

誰が、わたしたちの聞いたことを信じるだろうか。

主の腕は、誰に露^{あら}わになっただろうか。

彼は主の前で若枝のように、

乾いた土地の中の根から生え出た。

わたしたちが見るに値する風貌も威厳も彼にはなく、

わたしたちが欲する威容もなかった。

彼はさげすまれ、人々から見放され、

苦しみの人で、病を知っていた。

人は彼を見ないよう顔を隠してしまうほど、

彼はさげすまれ、

わたしたちは彼を顧^{かへり}みなかった。

まことに、彼はわたしたちの病を担い、

わたしたちの苦しみを背負った。

わたしたちは、彼が神によつて

打たれ、たたかれ、卑しめられていると考えた。

彼は、わたしたちの背きの故に刺し貫かれ、

わたしたちの悪の故に打ち砕かれた。

彼の上に下された懲^こらしめが

わたしたちに平和をもたらし、

彼の傷によつてわたしたちは癒やされた。

私たちはみな、羊のように迷い、

それぞれ自分の道に向かったが、

主はわたしたちみなを悪を彼に負わせられた。

「虐げられ、苦しめられたが、彼は口を開かなかった。

屠られるための小羊のように、彼は引いていかれ、毛を刈る人々の前の雌羊のように、

彼は物も言わず、口も開かなかった。

虐げと裁きにより、彼は取り去られた。

まことに、彼は生ける者の地から断たれた。

その行く末を、誰が考えただろうか。

彼が受けた致命傷は、わたしの民の背きの故だった。

彼は不正を働かず、その口には偽りがなかったが、

その墓は悪者どもとともに、

その塚は金持ちとともにされた」。

主は、彼を病苦で打ち砕こうと望まれた。

もし彼が自らを賠償の献げ物とするなら、

彼は末永く子孫を見るだろう。

主の望みは彼の手によって成し遂げられる。

「彼は自らの辛苦を抜け出て光を見、

その悟りによって満足する。

わたしの正しい僕は、多くの者を正しい者とする。

彼らの悪を、彼が背負った。

それ故、わたしは多くの者を彼の取り分とし、

彼は力ある者を、分捕り物として取る。

彼が自分の命を死に至るまで注ぎ、

背く者とともに数えられたからである。

彼は、多くの者の罪を担い、

彼らの背きのために執りなした」。

この五三章は「エヴェレストにも比すべき峻峰」であると書いた。まさにヘブル思想、ヘブル文学の頂点である。登山経験もなく、山岳知識もなく、道具も持たない人間は、雲に隠れているその頂点を麓からうろうろと、ただただ眺めることしか出来ない。

(二) 麓から山頂を眺めて

一体この詩は何を言おうとしているのであろうか。それが何となくわかるようで、わからないので「謎の詩」と言われるわけだが、これがだれのことを歌っているのかが明らかになれば、一応は理解できる。そのため、さまざまな仮説が提出されるが、未だに定説はない。ただ、この詩はあらゆる註釈を抜きに読んでも、何か心に訴えるものがあるのではなからうか。

巻末に載せた年表をご覧ください。

- ① 一―三九章ができたのが、紀元前七四〇年―六九〇年
 - ② 四〇―五五章ができたのが、紀元前五四六年―五三九年
 - ③ 五六―六六章ができたのが、紀元前四〇〇年―三〇〇年
- と言われている。

当然、一人の人物が書いたものではない。①の著者が預言者イザヤであることは分かっている。そのことから、四〇―五五章の著者を第二イザヤ、五六―六六章の著者を第三イザヤと呼んでいる。学説では、第二イザヤは一人ではなく複数という説もあるという。

四〇―五五章は、作者の名は明らかではない、いわば「読みびと知らず」である。だがこの詩は、後代の編集者の手によって『イザヤ書』に編入されたため、学者はこの作者を仮りに「第二イザヤ」と呼んでいるのである。

記されたのはバビロン捕囚の末期、屈辱と悲慘のうちに救いを待望しながら、半ばそれを諦めかけていた時期であったと言われている。

ただ、かすかな希望もなくはなかった。ペルシャのキュロス王はすでに兵をあげ、その勢力は次第にバビロンへと迫っており、バビロニア大帝国からの解放もありえないわけではなかったのである。しかし事態がどうなるかはだれにもわからない。戦争が、今以上の悲慘を招来しないとだれも保証できない。この暗黒と不安の中で生れたこの詩に、実にさまざまな宗教的・哲学的・思想的解釈がなされるのも、また致し方ないが、おそらくは一種の劇詩乃至は交誦歌であつたと言われている。

ここに書かれている「苦難の僕」とは一体、誰なのかということを巡って数知れない学者が研究し、正解は得られていない。おそらく永遠に出ないであろうとさえ言われている。

ところで、預言者と言われる人は、時代的に言えば、紀元前十世紀、はっきりした形で預言者という存在が出てくるのは紀元前八世紀であると言われている。思想的に見て、これは非常に特異なものである。

聖書では、「予言」とは書かず、「預言」と書く。

未来を予測してあらかじめ言うのではなく、神の言葉を預って言う、という意味である。

なお、イスラムのコーランではイエスのことを「優れた預言者」と位置づけている。

「苦難の僕」とは誰なのかについて、三笠宮崇仁親王（日本オリエント学会名誉会長）と七平先生との対談がある。

山本 捕囚期のだいたい終わりころに、最大の預言者第二イザヤ（『イザヤ書』第四〇章―第五章）が出てきて、これは旧約思想の最高峰で、同時に謎であり、またいわゆる「キリスト預言」という考え方から、『イザヤ書』第三章はイエス・キリストの出現を預言したと信じられ、キリスト教にも非常に大きな影響がありました。このように宗教的に解釈すれば別ですが、そうでないと、ここで出現した「苦難の僕」とはだれのことを言っているのか非常にわかりにくくなります。と同時に、この第二イザヤは旧約前期の思想的結論のようになるわけですが、この第二イザヤというのはいったいどんな人間で……。

三笠宮 最初のイザヤとは違う、まったく無名の預言者ですね。

山本 彼がほんとうに何を言おうとしたのか、ということですね。慰めの預言者だとか、救済の予告とか、言われるわけですが、やはり捕囚期間というものを、一つの贖罪のようにみているわけなのですか。自分たちの苦難が罪をあがなったから、ここで解放されるのだといったような。

三笠宮 そうです。第二イザヤのいちばん特徴的な個所は、いわゆる「僕の歌」と呼ばれている「慰めよ、我が民を慰めよ」に始まるいくつかの詩ですね。

山本 ここで自分たちを、この状態から救助してくれる者、いわば救済者^{メシア}が、王といった権力者のほかに求められてくるわけですね。では、求められているのがどのような対象なのかということ、その結果とは何を意味しているのかということにもなって、永遠の議論になるのですが、政治的なことは除いて、そういう一つの対象が、自らが犠牲となり自らを滅ぼすことによって自分たちの民族を救済するという発想なのですか。

三笠宮 ちよつと余談になるかもしれませんが、この第二イザヤと、次の第三イザヤ（『イザヤ書』第五六章～第六六章）と呼ばれる無名の預言者になぜイザヤの名が冠せられたか、不思議に思われる方がありません。しかし、それは三者の内容に共通の神学的テーマがみられるからだと言われます。それは「神の義」です。ダンテの『神曲』をもしのぐほどの壮大な、宇宙の終末的ドラマだとたたえている学者もいます。

それからメシアの問題がありますね。第一イザヤ（『イザヤ書』第一章～第三章）は、まだダウイドの後裔に望みを託していたわけですね（『イザヤ書』第九章七節）。いわば、まだ栄光のメシアを夢見ていたわけでしょう。だけど、捕囚になり、第二イザヤの時代になると、様相が一変したのでしょうか。「見よ、我が僕は栄え、揚々と上げられ大いに高くなろう。かつては人々汝を見てうちふるえた。その面影世の常ならずそこなわれ、その容姿、人の子と見えざりしゆえに……」（第五二章一三～一四節）。これが第二イザヤのメシア観ですから。つまり従来は他力本願だったのが今度は自力本願に変わったとも言えます。

キリスト教徒には『イザヤ書』五三章はイエス・キリストの出現を予言したと解され、それで『イザヤ書』は広く知られるに至ったのである。

「ペテロ第一の手紙」の筆者は明らかに、イエスの中に「苦難の僕」を見ている。そしてこれがキリスト像となった。つまり「苦難の僕」がなければ、このようなキリスト像は描かれなかったと言える。これが新約聖書の受け取り方であり、それがキリスト教思想の基本の一つになっているわけである。

だがこれはあくまでも新約聖書の筆者の見方である。

キリスト教徒の旧約学者も、学問的にはこの詩はイエス・キリストの出現を予言したものではないということは認めている。しかし、ナザレのイエスがこの詩を知り、これから深い影響をうけたのは事実である。

ルカによる福音書四・一六～二一を見てみよう。

ナザレでの説教

さて、イエスはお育ちになったナザレに行き、安息日に、いつものとおり会堂にお入りになった。そして朗読しようとしてお立ちになると、預言者イザヤの書が手渡された。イエスがその巻物をお開きになると、こう記された箇所が目にとまった。

「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を伝えるために、

主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、

囚われ人に解放を、

目の見えない人に視力の回復を告げ知らせ、

抑圧されている人に自由を与え、

主の恵みの年を告げ知らせるためである」。

イエスは巻物を巻き、係りの人に渡して、席にお着きになった。会堂にいたみな目はイエスに注がれていた。

そこで、イエスは彼らに向かって話し始められた、「この聖書の言葉は、あなた方が耳にしたこの日、成就した」

七平先生はこう書かれている。

「イエスは『ダニエル書』で生き、『僕しもべの歌』で死んだ」のはおそらく事実であって、彼が自らをこの「僕」に擬したことはほぼ疑問の余地がない。すなわちイエスは、この詩の「僕」を身をもつて体現しようとしたのである。その意味では、この一編は、人類に最大の影響を与えたといえる。一体この「僕」とはだれなのか。もちろん一個人ではあるまい。私はやはり、「僕」の中に神の殉教の民イスラエルを見、全世界の目の前で苦難をうけるがそのことにより贖われるとする、伝統的なユダヤ人の解釈が正しいと思う。また、この詩は、常にユダヤ人とともにある、その心である。

「苦難の僕」とは捕囚民そのものを指しているという解釈である。

「苦難の僕」が一個人を指すか否かは研究者がこれからも努力を重ねて行くであろうが、われわれは、『イザヤ書』とは、イスラエル人の苦難の時代に神を如実に見た人の記録と、そう考えれば、当たらずとも遠くはないであろう。

「ペテロ第一の手紙」のように見たことがイエス理解の一つの伝統となり、「御足の跡を踏み従うように」コルベ神父のような人を生み出した。これが、この思想が現在にも生きている証拠である。そう思いつつこの詩を読みなおすと、ある一つ

の現実感をもつてこの詩はわれわれに迫ってくる。

と七平先生は書かれている。

(三) 終わりに

今が苦しくとも、必ずやいつの日か、再び苦しみから解放される日が来る、と『イザヤ書』は警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

花は咲き 花はうつらふ
過ぎし世の光榮^{はえ}ふみしみて
まなかひに世界ををさめ
現実を生きてし抜かん

なげかめや昔を今と
荒波よ狂はば狂へ
黒雲よゆくてはとざせ
我が胸は希望高鳴る

これは、学習院院歌の詩の一部である。当時の院長・安倍能成はこう解説している。

花は、咲くがまた色あせて萎むものである。学習院もこの盛衰はのがれにくい。ただ長い歴史の間に養って来た名誉ある学風と精神とを基にして、わるいことはどしどし改め、広く世界のことを眼の中に入れて、狭く独りよがりにならず、現実(世の中)の醜さや苦しさに負けないで生きぬいてゆこう。

日本も世界の三大強国だとか五大強国だとか威張った時があった。学習院も校舎も立派で豊かな時もあったが、昔はよかつ

た、よかった、と嘆いて居てはいけない。荒浪が狂つても、黒雲がゆくさを閉ざしても、みんなの胸に希望のラッパを高く鳴らして、屈せず進め。

『イザヤ書』を読む度に、何故か学習院院歌と重なるのである。

カール・バルトの『聖書と説教』にも『イザヤ書』を用いて書かれた箇所がある。バーゼル刑務所での説教である。それを最後に述べておきたい。

「わたしはほんの一瞬、きみを見棄てた。だが、大いなる憐れみをもって、わたしはきみを呼び集めよう。わたしは我が顔を、怒りの瞬間きみから隠した。だが、永遠の恵みをもって、わたしはきみを憐れんだ」と、きみを贖う方なる主は語り給う。

(五四章七―八)

バルトは語る。

いかなる人生においても、私たちの内の誰か或る一人の人生においてすらも、《私は、もしかしたら神から見棄てられているのかもしれない。神をこんなにもしばしば棄ててきたし、今なお絶えず新たに棄てている私なのだから》、と感じてしまい、こうした考えを抑えることができないと思ってしまうような幾つもの「瞬間」、いや、数時間・数日間・数週間、ひよつとすると数年間、が決してないわけではない、ということです。

その暗黒は「ほんの一瞬」のことであり、その後には永遠の「瞬間」が^{あらわ}顕れるとバルトは説いたのである。

主な参考文献

- (一) 『聖書』(フランシスコ会聖書研究所 二〇一二年 サンパウロ)
- (二) 『Voice 山本七平追悼記念号』(一九九二年 PHP 研究所)
- (三) 『「空気」の研究』(山本七平ライブラリー① 一九九七年 文藝春秋社)
- (四) 『日本人と聖書』(山本七平 一九七七年 TBS ブリタニカ)
- (五) 『女の一生 二部・サチ子の場合』(遠藤周作 一九八六年 新潮文庫)

- (六) 『落葉の声』(曾野綾子 一九九〇年 聖母の騎士社)
- (七) 『日本人の人生観』(山本七平 一九七八年 講談社学術文庫)
- (八) 『ユダヤ学のすべて』(沼野充義編 一九九九年 新書館)
- (九) 『聖書と説教』(バルトセレクション1 二〇一〇年 新教出版社)
- (シナイ山写真は筆者撮影)

一 「ミリオソ」は、左右二歩を一步とするローマ式一千歩の意味。約一、四八〇メートル。

二 「誦」はとなえる。うたの意。

三 三笠宮崇仁(みかさのみや たかひと) 一九一五年、東京に生まれる。東京大学文学部研究生修了。日本オリエント学会名誉会長。東京女子大学、青山学院大学講師。著書・訳書に『乾燥の国』(平凡社)、『大世界史Ⅰ ここに歴史はじまる』(文藝春秋)、J・フィネガン著『古代文化の光』『聖書年代学』(岩波書店)他。

聖書関連年表

B C

- 二九〇〇〜二三〇一 エジプト古王国時代。第三、第六王朝下にピラミッド造営
- 二四〇〇〜一八〇一 メソポタミアにアッカド王朝(二四世紀)、グティ王朝(二三〜二二世紀)、新シュメール興る
- 二二〇〇〜一八〇一 ウル第三王朝(二二世紀)に「シュメール王名表」
- エジプト中王国時代。「シヌヘ物語」に当時のパレスチナの事情を記す。「ベニ・ハサン壁画」にセム系遊牧民のエジプト入国風景を描く
- パレスチナにカナン都市国家。族長時代?
- 二〇〇〇〜一五〇一 シリアにマリ王国。メソポタミアに古巴ビロン王朝、第一王朝のハムラビ「ハムラビ法典」制定
- 一八〇〇〜一五〇一 アナトリアにヒッタイト(聖書のヘテ)王国興る
- 一六〇〇〜一二〇一 エジプト新王国時代。シリア・パレスチナへの軍事遠征盛ん。一八王朝期「アマルナ文書」にアピル(ハピル)に言及。一九王朝ラメセス二世(一二九〇〜一二三四)ヒッタイトと相互不可侵条約締結。メルネプタ(一二三四〜一一)の「イスラエル碑文」にイスラエルの名を記す

一四〇〇～一三〇一 中期よりメソポタミアにアッシリア台頭。周辺民族を征服。シリア・パレスチナに侵攻。七世紀末新バビロニアに滅ぼされるまで中近東諸国の脅威となる

一三〇〇～一二〇一 出エジプト。シナイ半島でのモーセの十戒授受を経て、イスラエル民族パレスチナに到る

一二〇〇～一〇〇一 パレスチナにヨシユアの指揮下イスラエル諸部族の都市取得始まる。イスラエル部族連合と士師の時代。ペリシテ人パレスチナ海岸平野に侵入、やがて中央山間部に進出。対抗上イスラエルは預言者サムエルの下、サウルを王に選出、イスラエル統一王国成立

一〇〇〇頃 ダビデ、統一イスラエル王国の王に即位。「詩編」(一〇〇〇～一〇〇)にダビデに帰せられるものがある

九九八 ダビデ、エルサレムを征服、新王朝を建設

九六一 ソロモン即位(～九二二)、エルサレムに神殿を建設

九五〇～八五〇頃 ヤハウィスト(J)文書(創世記「出エジプト記」「民数記」「申命記」「ヨシユア記」「士師記」の一部)／アッシリア帝国のシリア・パレスチナ侵攻

九二二 イスラエル王国、ユダ王国とイスラエル王国に分裂

七六〇～七五〇 「アモス書」

七五〇頃 エロヒスト(E)文書(創世記「出エジプト記」「民数記」「申命記」「ヨシユア記」「士師記」の一部)

七四六～七三四 「ホセア書」(一部六世紀に加筆)

七四〇～六九〇 「イザヤ書」(一～三九章)

七二二 アッシリアにより首都サマリヤ陥落、イスラエル王国滅亡

七一四～七〇〇 「ミカ書」

六二五 新バビロニア帝国成立(～五三九)

六二五頃 「ゼファニヤ書」

六二二 「律法の書」発見、ヨシヤ、宗教改革に着手

六一一頃 申命記史家(D)文書(「出エジプト記」「民数記」「申命記」「ヨシユア記」の一部)

六一二以降 「ナホム書」

六一〇頃 「列王記」上下(第一回)

六〇九～五九八 「ハバクク書」

六〇五～五三八 「エレミヤ書」(五～三世紀に一部加筆)

- 五九七 バビロニア、エルサレムを占領（第一回バビロン補囚）
- 五九二～五三九 「エゼキエル書」
- 五八七 エルサレム陥落、ユダ王国滅亡（第二回バビロン補囚）、ユダヤ教の形成
- 五八六頃 「哀歌」
- 五八二 第三回バビロン補囚
- 五五〇 ペルシャのキュロス二世、メデシア王国を倒し独立
- 五五〇頃 「サムエル記」上下、「列王記」上下（第二回）
- 五四六～五三九 「イザヤ書」（四〇～五五章）
- 五三九 ペルシャ、新バビロニア帝国を征服、シリア・パレスチナを支配
- 五三八 キュロスの勅令により、ユダヤ人、帰国を許される（第一回帰還）
- 五三八～四五〇 祭司（P）文書（「創世記」「出エジプト記」「民数記」「申命記」「ヨシヤ書」の一部、「レビ記」）
- 五二五 ペルシャ、エジプトを征服、オリエント世界を統一
- 五二〇 ゼルベバベルとヨシヤ、エルサレム神殿再建に着手
- 五二〇頃 「ハガイ書」「ゼカリヤ書」（一～八章）
- 五一五 エルサレム第二神殿完成
- 五一五～四五八 「マラキ書」
- 五〇九 ローマ共和国成立
- 四五〇頃 「オバデヤ書」
- 四四五 ネヘミヤ、エルサレムの城壁を完成
- 四四〇頃 「ルツ記」
- 四〇〇～三五〇 「エズラ記」「ネヘミヤ記」「ヨエル書」
- 四〇〇～三〇〇 バビロニアで祭司による「律法」（モーセ五書）成立
- 四世紀 「イザヤ書」（五六～六六章）
- 「ヨブ記」
- 三九七 エズラ、エルサレムに帰り、「律法」を公布

三三八	ローマ、全ラティウムを制圧
三三六	マケドニアのアレクサンドロス王即位（一三三三、三三四東征開始）
三三三	アレクサンドロス、シリア、パレスチナを併合
三三二頃	『ゼカリヤ書』（九一―十四章）
三三〇	ベルシャ帝国滅亡
三二二	セレウコス朝シリア成立
三一〇	エジプト、プトレマイオス王朝成立
三〇〇―二五〇頃	『歴代誌』上下、『箴言』『雅歌』
三〇〇頃	『ヨナ書』
三〇一	パレスチナ、プトレマイオス朝の支配下に
二五〇頃	『コヘレトの言葉』（伝道の書）
一九八	パレスチナ、セレウコス朝の支配下に
一七〇―一六〇	『エステル記』『ダニエル書』
一六九	セレウコス朝のアンティオコス四世、エルサレム神殿に侵入
一六七	アンティオコス四世、ユダヤ教を禁止
一六七―一六二	マカベア戦争
一六五	エルサレムを奪回
一四二	ユダヤ・ハスモン王朝成立
一五〇―一〇〇	『アリストテアスの手紙』他、旧約外典・偽典の多くの著作が成る
〃	クムラン教団、パリサイ派、サドカイ派成立
五九	ローマのポンペイウス、シリア、エルサレムを征服。ユダヤ、ローマの属州シリアに編入される
四〇	カエサル、執政官（コンスル）に就任（四四暗殺される）
四頃	ヘロデ、ユダヤの王に即位（四〇〔三七〕―四）
	イエス、生まれる

A D

- 二六
二八～二九頃
三〇頃
三三頃
四七～四八
五〇～五一
五〇頃～五一
五一～五六
五三頃～五九頃
六〇頃～六一頃
六六～七〇
七〇前後
七三
七五～七九
八〇～八五頃
八〇～九五
八五～九〇
九〇～九五
九〇～一二〇頃
九〇～一二五頃
九三～九四
一〇〇頃
一〇〇前後
- ポンテオ・ピラト、ユダヤ総督に就任（～三六）
洗礼者ヨハネの活動、イエス、受洗し布教活動を始める
イエス、処刑される
パウロの回心、パウロ、伝道活動を始める
パウロ、第一回伝道旅行
パウロ、第二回伝道旅行
「テサロニケの信徒への手紙」（一・二）
パウロ、第三回伝道旅行
「コリントの信徒への手紙一」「ガラテヤの信徒への手紙」「コリントの信徒への手紙二」「ローマの信徒への手紙」「コロサイの信徒への手紙」
ペテロとパウロ、ローマへ。「フィリピの信徒への手紙」、「フィレモンへの手紙」
第一次ユダヤ（対ローマ独立）戦争、エルサレム神殿炎上（七〇）
「マルコによる福音書」
マサダ陥落
ヨセフス『ユダヤ戦記』
「マタイによる福音書」「ルカによる福音書」
「ヘブライ人への手紙」「ペトロの手紙一」
「エフエソの信徒への手紙」
「ヨハネの黙示録」
「使徒言行録」
「ヨハネによる福音書」
ヨセフス『ユダヤ古代誌』
ヤムニアでユダヤ教の聖書正典決定／「ヤコブの手紙」
「ヨハネの手紙」（一～三）

一三〇〜一四〇

一二〇頃

「テモテへの手紙」(一・二)「テトスへの手紙」
「ユダの手紙」

一三三〜一三五

第二次ユダヤ戦争(バル・コクバの乱)、ユダヤ軍一時的にエルサレムを奪還

一三五

エルサレム、ローマ軍に陥ち、コロニア・カピタリーナと改称、ユダヤ人を追放

一三五頃

グノーシス主義者、ローマで活動

一四〇頃

マルキオン、ローマで活動

一四四

マルキオン、キリスト教会から破門される

一五〇頃

「ペトロの手紙二」

二世紀半ば

新約外典各書成る

一七八頃

マルクス・アウレリウス『自省録』

一八〇〜一九〇

エイレナイオス『異端反論』

三二二

「ミラノの寛容令」によりコンスタンティヌス帝、キリスト教を公認

三二五

ニカイア公會議(第一回世界會議)開催

三八二〜四〇五頃

ヒエロニムス、ラテン語による聖書翻訳(ヴルガータ訳)完成

三九七〜四〇〇

アウグスティヌス『告白』

三九七

カルタゴ會議でキリスト教の聖書正典決定

四七六

西ローマ帝国滅亡

六一〇

ムハンマド(マホメット)、メッカでイスラームを創唱

六二二

イスラーム暦元年

六三二

ムハンマド没。イスラーム教徒、エルサレムを占領

九六二

神聖ローマ帝国成立

一〇五四

東西教会分裂

一〇九六〜九九

第一回十字軍(以後、一二九一年まで全八回)

一三八二

ウィクリフ「英訳聖書」完成

一四五三

東ローマ帝国滅亡

- 一五一七 ルター、九五カ条提題
- 一五二〇 ルター、宗教改革三大文書〔「基督者の自由」〕「教会のバビロニア幽囚」〔ドイツ国民の基督者貴族に与う〕発表
- 一五二二 ドイツ語新約聖書出版ツイヴィングリー、第一回チューリッヒ討論（第二回は一五二三）
- 一五三四 イエズス会創設
- 一五三六 カルヴァン『キリスト教要綱』
- 一五四五～六三 カトリック、トリエント公会議開催
- 一五四九 ザヴィエル、鹿児島に渡来
- 一五九八 ナントの勅令（一六八五廃止）
- 一六一一 ジェームズ王欽定訳聖書（KJV）
- 一八三七／四〇 最初の日本語聖書、ギユツラフ『約翰（ヨハネ）福音之伝』シンガポールで刊行
- 一八五九 シナイ写本発見
- 一九四五 ナグ・ハマディ文書発見
- 一九四七 死海写本発見
- 一九七八 「ユダの福音書」の写本、エジプトの洞窟で発見される（二〇〇六、復元作業完了）